

## 標茶町立標茶小学校 フィールド学習 実施内容

### 《概要》

[日程] 2020年7月9日(木)

[参加者] 5年生児童52名

[講師・案内] 環境省 瀧口自然保護官、高橋自然保護官補佐  
山本・安保・安田(公益財団法人 北海道環境財団)

[フィールド学習の目的]

・体験活動を通して、湿原に関わりのある様々な環境、事象について関心と理解を深める。

[実施プログラムの概要]

9:40 達古武オートキャンプ場到着

10:00 オリエンテーション、苗畑でのフィールド学習

10:10 フィールドでの活動

11:50 フィールド学習終了

### 《実施内容(記録)》

#### ■オリエンテーション(10:00)

##### ○挨拶(環境省 瀧口自然保護官)

皆さんが今いる場所は日本で一番広い湿原の釧路湿原の一部分にいる。普段、環境省のレンジャーとして、その湿原を守る仕事をしている。今日は、釧路湿原がどんなところか少しでも知ってもらいたいと思う。わからないところはスタッフに聞いてもらいたい。(スタッフ紹介)



##### ○スケジュールの確認(北海道環境財団 山本)

#### ■苗畑でのレクチャー、森や苗木の観察(環境省 瀧口自然保護官)

目の前の畑を見てもらいたい。何の畑かわかるだろうか。これは木の畑で、この山から種を取ってきて育てている。周りの森を見たときに、色や葉の形が違うことがわかるだろうか。目の前の森と左側にある森は感じが違うことがわかると思うが、何が違うか教えてもらいたい。山にはいろいろな木があるが、正面の木はこの地域に元々生えていた木。秋には葉の色が変わり、冬になると葉を落とす。左側の森は木の先がとがっている形をしており、元々はこの地域になかった木。み



んなの机や建物を作るために昔植えた木。いろいろな木が釧路湿原の周りにいっぱい生えている。釧路湿原は一年中水で湿っているイメージがあるかと思うが、森に降った水がゆっくり地面にしみ込み、湧き水として湿原まで流れていく。元々この地域になかった森では、その湧き水が出なかつたりということも起こってきて、元々あった森に戻そうということでは行っている。目の前にある畑では、元々あった森からとった種で苗木を作って、大きくして、森に植え、元の森に戻していこうとしている。そうすることで、湧き水が出るようになり、釧路湿原が水で潤い、湿原のまま保たれる。

## ■クラス毎に分かれてフィールドでの活動（10:10）

※以降は1つのグループの活動を記録（案内：北海道環境財団 山本）

### ○フィールドワーク前の注意点の確認

途中で水飲み休憩をとるが、5年生で各自判断できる年齢だと思うので、各自で水を飲んでもらいたい。ただし、戻ってくるまでになくなってしまうと困るので、一回に飲む量は考えて飲んでもらいたい。万が一なくなったら、我慢せずに言ってもらいたい。

また、ハチが近寄って来たらどうしたら良いだろうか（しゃがむ、じっとしていると児童の声）ハチは刺したいと思っているわけではなく、自分の身を守ろうとして刺す。自分が石になったつもりで、草になったつもりで、動かない。一番やってはいけないことは何だろうか。手で振り払ってしまうと、ハチは怒って刺してくるので、手で払いのけることは絶対にやらないようにしたい。ハチが来たら大人に静かに指をさして伝えてもらいたい。大人がかけつけて対応するので、皆は動かないでいてほしい。

また、今日はいろいろなものを手で触ってもらいたいですが、触ってはいけない草もある。痛かったり、かゆくなったりする草がある。歩き始めてから、実際にその草があったら、そこで説明する。触ってはダメなこともあるということ覚えておいてもらいたい。

### ○イラクサの群生地

シソの葉に似ているが、これがイラクサと言って、触ってはいけない草。触ると肌がかゆくなったり、痛くなったりするので、素手で触らないで欲しい。



### ○シラカバの凍裂の跡

木の幹に縦の線がついているが、これは誰の仕業かわかるだろうか。（人、クマ、雷と児童の声）この跡からすると、どれもハズレと思われ、生きものではなく自然の中で起こったこと。答えは寒さ。水は凍ると大きくなる、体積が増えるということは知っているだろうか。木の中にも水は



あり、冬に凍り付かないように木もいろいろな工夫をしている。それでも寒さがとても厳しいところでは木の中にある水が凍って木が裂けてしまうといったことが起こる。こうした跡が木についている場所は、木の中の水が凍るほど寒くなった証。

### ○ハチのトラップの観察（子どもたちが気になるものとして発見）

ペットボトルの中にハチが好きな甘い香りがするものを入れている。ハチが舐めに来て、出ることができずに溺れて死んでしまう。なぜ、このようなものを吊るしているのだろうか。（人を刺すからと子どもたちの声）森の中に暮らしているハチが悪者というわけではない。ここは道があり人が通るので、人が通る場所に巣などがあると自分を守るためにハチも刺してくる。このため、ごめんなさいという気持ちで、このトラップをぶら下げて、ここにはハチの巣を作らせないようにしている。ハチも森の中で大切な役割を果たしていて、ハチが悪いというわけではない。



### ○遊歩道入り口

ここから森の中に入っていく。いろいろなものを見つけながら歩いていきたい。横に流れている小川は湧き水からできたもので、いろいろな生き物も住んでいる。森を歩いた後に、どんな生き物がいるか調査してみたい。

### ○イラクサの群生地

先ほどお話したイラクサが多く生えている。素手で触らないように注意したい。

### ○いろいろなものミツケ

#### ・キノコを見つける

キノコは弱った木についている。健康な元気な木にはキノコはつかない。歩きながらキノコがついている木を見つけたら、この木は弱っているんだなと思って見てもらいたい。



#### ・木に空いた穴を見つける

これは誰の仕業かわかるだろうか。答えはキツツキ。穴の形や大きさで、何のために空けた穴かわかる。きれいな丸い穴は子どもを育てるために空けた穴で、小さなもの、細長いもの、端がギザギザのものは、エサを食べるために掘った穴。穴が空けられている木は、実は弱っていたり枯れてしまっている木。キノコと同じく、元気な木にはキツツキも簡単には穴を空けられない。またエサになる虫も、そうした弱った木についているので、それを食べにくる。

- 水の音を見つける

水の音を見つけてもらいたい。丘のほうからチョロチョロという音が聞こえただろうか。丘の方を見ると、斜面に木が生えていて、森の奥から水の流れがあるわけではない。ということは、斜面から湧き出てきた湧き水。斜面から枯れることなく流れてきている。

- 動物がいた跡を見つける

姿は見えないが、ここに動物がいた跡がある。見つけられるだろうか。ヒントは草。回りにある草と比べて少し違う草があるので、それを探してもらいたい。（葉の先が食べられた跡を児童が見つける）これは何かの動物が草を食べた跡。何の動物か考えてもらいたい。（ヒグマ、ネズミなどの声）木道に沿って長い範囲で草が食べられているので、ある程度の大きさの動物と思われる。



ヒグマだったら怖いと思うが、この食べ跡はヒグマではない。（シカと児童の声）詳しい人であれば食べ跡から見分けられるが、自分はそこまで詳しくない。それでもシカが正解だと思う。その証拠は、周りにシカの足跡やフンがあるから。斜面の方を見るとシカが通った跡があり、木道を挟んで湖の方まで続いている。実際に姿が見えなくても「いない」わけではなく、いた証が残されているので見つけてもらいたい。

- 森から湖までの景色

よく見ると、いろいろな葉っぱの形、大きさの植物がいると思う。一番奥に湖が見えるが、その手前は何色だろうか。（茶色、枯れた色と子どもの声）あの湖の横に生えている植物は、目の前にいる植物の中では水にとっても強い。湖と同じくらいの高さの平らな場所に生えている木も水に強い種類が生えている。一方で斜面の方に生えている木、植物を見ると、少し違う種類が生えていることがわかるだろうか。斜面の方に生えている木や草は、水がいっぱいあると生きていけない種類が生えている。実は、自然の中にいる生き物は、他の生き物と競争をしていて、植物で言えば、水、光、場所とりなどをして競争をしている。水が多いところに生えている植物も、斜面の方で生きていけないわけではないが、斜面の方に今いる植物の方が強いので、競争に負けて生きていけない。逆に斜面の方にいる植物は、水辺の方に行くと生きていけない。それぞれが、得意、不得意があり、周りにはいる植物は、それぞれ得意な場所に生えている。このため、光や水の環境によって、生えている植物が違ってくるといことになる。

### ・変な形の木

木からダランと下がっている変な木がある。木を根本の方にたどっていくと、実は道の横に生えている木とは別の木だということがわかる。この立っている木に絡まって生えていて、道をまたいで隣の木に絡まっている。葉っぱがついているが、秋には美味しい果物がつく。何の果物かわかるだろうか。これは自然の中にあるブドウで、山ぶどうという木。ジャムにして食べると美味しい。



また、ここに倒れた木があるが、枯れているわけではなく、これも変な形に見える。どこが変だろうか。木は真ん中の太いところと枝とに分かれていると思うが、この倒れた木は、枝が上に伸びて、新しい幹を作ろうとしている。木はがんばって生きている。

### ○小川に棲んでいる生き物の観察

ここでは、グループに分かれて、どんな生き物がいるか観察してもらいたい。これから網の使い方などを説明する。(捕獲方法を説明)生き物が捕れたら観察水槽に入れて観察する。気温が高いので、狭い水槽にずっと入れておくと生き物も弱ってしまうので、グループの皆で観察したら小川に戻してあげて欲しい。(グループに分かれて生き物調査を行う)



今日はいくつか魚も見つけることができた。魚がいるということは、魚の食べ物があるということで、エビ、葉っぱ、葉っぱについている小さな虫などがいっぱいいるということ。また、隠れ家も必要で、ここには、そうした隠れ家もいっぱいある。そういう場所に魚は隠れて生活している。これから、総合学習で勉強をしていくと思うが、魚に興味を持ってまた探してみる子がいるかもしれない。その時に捕れなかったとしても、いらいわけではなくて、上手く隠れているんだなと思ってもらいたい。



### ○小川沿いに湖畔まで散策

右手の林を見てもらうと、湖に近づくにつれて枯れている木が多くなってきていることがわかるかと思う。水に少しかった場所でも生きていける湿原の木といっても、湖近くになると、生きていくことが難しくなり、やがては枯れてしまう。枯れている木が多く見られる場所からさらに湖側に行くと、木の姿はなくなり、湿原で多く見られる、より水に強い草が生えている。

湖面を見ると、何かに覆われている。これは何かわかるだろうか。ヒシという水草で、元々はこちらまで湖面を覆いつくすほどはなかった。かつて、湖の周りから栄養が多く流れ込んで、これほど増えてしまったのではないかとされている。ここまで湖を覆ってしまうと、元々ここで生きてきた水草や湖の中の生き物に悪い影響がある。今ではその原因も取り除き、元々あった水草が生えてくるようにしようと、このヒシの数を減らそうとしている。（昨年のヒシを拾ったり、小魚の観察等を行う）



■オートキャンプ場センターハウス到着・フィールド学習終了（11：50）